

大垣市金生山化石館

# 化石館だより



## コラム

### 濃飛八景 金生山からの眺望



美濃赤坂の中心部を東西に走る旧中山道から子安神社の脇を抜けて急坂を登ると、正面に大きな岩が現れその上に「濃飛八景 金生山」と記した石碑が建っています。その先20mほど上には熊野敏夫先生の銅像が石碑を見守るかのように建てられています。

濃飛八景は1930年（昭和5年）に当時は「岐阜日日新聞社」であった「岐阜新聞社」が読者の投票によって選定したものです。金生山の山頂からは濃尾平野を一望することができ、その眺望の素晴らしさは古くから知られてきました。金生山化石館設立の基となった故熊野敏夫先生は、1924年（大正13年）に「美濃国金生山案内」という小冊子の中で傘松からの眺望をとりあげ「傘松こそ吉野で言うとも目千本という所であって “美濃の春 手に取るようぞ 金生山” とは実に此の所である」と称えておられます。熊野先生は化石研究の傍ら俳諧にも造詣が深く、獅子門に属する

有楽社という一派を設立しており、銅像の脇には「紅葉濃き 峠の茶屋に 発破鳴る」という彼の句碑が残されています。

さらに時代を遡れば、江戸末期に記された江村北海の「濃北紀遊」の中にも金生山の素晴らしい眺望に感嘆し、夢中で作詩に耽った様子が次のような記述として残されています。

「各自従容として以て東南を望むときは即ち勢（伊勢）の東部、張（尾張）の西部、尽く吟眸に入る。人々嘆賞して詩を賦す。士祥、俊才、手、筆を止めず。直ちに鐘鳴り鴉宿するに至りて後、山を下る。・・・」



雪を被った御岳山



その右手には遠く中央アルプスの山並み

右端の山は岐阜城を頂く金華山

北海は京都に住んでいましたが、郡上藩の客師として年1回講読のため郡上に出向いていました。その行き帰りの出来事を日記に残しているのですが、1776年（安永5年）10月10日の記録にこのことが書かれているのです。

金生山の東側は断崖によって断ち切られています。200m 足らずの丘のような山ですが、遮るものがないので、山頂からは北東から南、更に南西方向まで広く見晴らすことができます。この方向には濃尾平野が広がり、岐阜城を頂く金華山、小牧山や名古屋市の駅前ビル群、更には知多半島に連なる山々、南には養老山脈などが良く見えます。特に冬場は空気が澄んでおり山には雪がありますので、北東に御岳山、続いて駒ヶ岳をはじめ中央アルプスの山々、更に恵那山などを望むことができます。

中腹にある金生山化石館の駐車場からもこの光景を楽しむことができますが、徒歩で200mほど登ると傘松の下に着きますので、ここで後ろを振り返って雄大な眺めを楽しんで下さい。



金生山の山頂には真言宗の明星輪寺があります。この寺は寺伝によると持統天皇の勅願で朱鳥元年（686年）に役の小角が創建した古刹で、伊勢の朝熊山金剛証寺、京都嵐山の法輪寺とともに日本三虚空蔵の一つとされています。松尾芭蕉は奥の細道の旅の終わりに虚空蔵菩薩に詣でて「はとのこえ みにしみわたる いわとかな」という句を残しています。

本堂奥に蔵王堂があり、その上を岩巢公園と呼んでいるのですが、ここにはカルスト地形の面影が残っており、風化して奇妙

な形をした石灰岩の大石が林立しています。尚、これらの奇岩には「ごごと岩」「くぐり岩」「権現岩」等と名付けられており、岩々を巡り歩いて楽しむこともできます。また、眼下には杭瀬川の流れの向こうに、広大な濃尾平野が一望できますので、是非一度お立ち寄りください。

（文責：高木洋一）

\*\*\*\*\*

## お知らせ

### 前期 企画展

5月2日（水）より、「金生山の大理石と石細工」をテーマに、前期の企画展を開催します。他では見られない金生山の色彩豊かな大理石とこれを用いた石細工の作品を是非ご覧ください。赤坂における石細工の歴史についても解説する予定です。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)  
Email [kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp](mailto:kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp)